

# NEWSLETTER

ハマ発ニュースレター

横浜都市発展記念館館報●第20号



ご自由にお持ちください

ハマ発NEWSLETTER 第20号 2013(平成25)年7月9日発行(年2回発行・不定期)  
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜都市発展記念館 〒231-0021 横浜市中区日本大通12  
基本デザイン/高橋健介 印刷・製本/株式会社 佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453

## 【特集】 関東大震災と横浜

## 【展示余話】 地図でみる昭和初期の都市と野球場

## 【特別寄稿】 プロ野球・ユニフォーム「復刻」物語

横浜都市発展記念館

### EXHIBITION

特別展のご案内



開館10周年記念特別展

## 「関東大震災と横浜 — 廃墟から復興まで —」

1923(大正12)年9月1日に関東地方を襲った大震災から、今年で90年を迎えます。激震と火災により一日にして廃墟と化した横浜が、その後の震災復興事業のなかで新しい都市の骨格を形づくっていくまでの、激動の10年間をたどります。

【会期】 2013(平成25)年7月13日(土)～10月14日(月・祝)

【関連展示】  
横浜開港資料館 企画展示「被災者が語る関東大震災」  
横浜市史資料室 展示会「レンズがとらえた震災復興 1923～1929」  
【図録】「関東大震災と横浜—廃墟から復興まで—」1200円(税込)  
横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編、横浜市史資料室/協力

### 寄贈資料の紹介

平成25年1月から6月までに受贈した資料です。(敬称略)

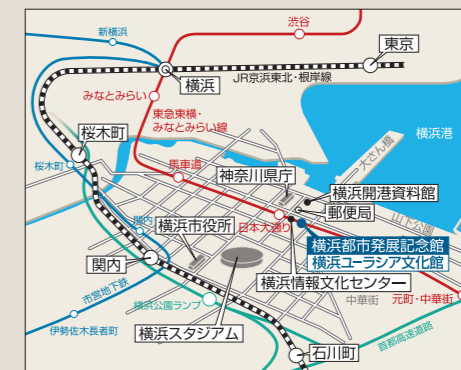
寄贈資料名	点数	寄贈者
フェリス和英女学校関係資料	6	長谷川義之
『西村好時作品譜』	1	西村陽子
日本プロ野球セパ誕生 50周年記念切手	1	小松富一
横浜市電記念乗車券(昭和10-20年代)ほか	5	小室研一
関東大震災・震災復興関係写真ほか	395	佐藤寛

●表紙図版  
11時58分で止まった横浜駅ホームの時計  
横浜開港資料館所蔵



### 横浜都市発展記念館 利用案内

- 開館時間  
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日  
毎週月曜日・年末年始ほか  
(月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日に休館します。)
- 入館料  
上記特別展開催期間  
特別展 一般300円 小・中学生150円  
(特別展の入館券で常設展もご覧いただけます。)  
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円  
それ以外の期間  
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円
- 毎週土曜日は小・中・高校生無料
- 「濱ともカード」「敬老特別乗車証」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。
- ホームページ  
<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



- 交通アクセス
- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
  - 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
  - JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
  - 横浜市営バス「日本大通り駅南口」下車徒歩1分
  - あかいづつバス「日本大通り」下車徒歩1分

### MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

- 刊行物
- 『ベースボール・シティ横浜』①  
横浜都市発展記念館/編 定価1400円(税込)
  - 『横浜の海 七面相』②  
横浜開港資料館・横浜都市発展記念館/編 定価800円(税込)
  - 『横浜にチンチン電車が走った時代』③  
横浜都市発展記念館/編 定価1500円(税込)
  - 『モダン横浜案内』  
横浜都市発展記念館/編 定価1500円(税込)
  - 『目で見る「都市横浜」のあゆみ』  
横浜都市発展記念館/編 定価1300円(税込)
- DVD
- 『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ  
定価各1500円(税込)  
第1巻・港とまちづくり 第2巻・都市の交通 第3巻・子どもたち



※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



編集後記  
本誌は今年から年2回の企画展の開催にあわせて刊行することにいたしました。開催中の企画展の解説、終了した展覧会の展示余話、所蔵資料の紹介のほか、ときには外部の方からの寄稿原稿もまじえて、昭和の都市横浜についてわかりやすく情報をお伝えしていこうと思っています。(吉)

◎次号発行予定 平成26年1月頃



# 関東大震災と横浜 — 廃墟から復興まで —



①横浜中央電話局屋上からみた被災状況  
大正12(1923)年10月上旬撮影  
長島弘氏寄贈・横浜開港資料館所蔵



②横浜中央電話局屋上からみた被災状況  
大正12(1923)年10月上旬撮影  
長島弘氏寄贈・横浜開港資料館所蔵



③被災した横浜中央電話局  
大正12(1923)年9月  
前川謙三撮影・横浜開港資料館所蔵

④上空からみた関内地区の被災状況  
[大正十二年九月 大正震災写真集 関東戒厳司令部]  
(大正13年)より



大正12(1923)年9月1日に南関東地方を襲った大震災から、今年でちょうど90年を迎える。マグニチュード7.9の激震と直後に発生した火災によって、横浜は一日にして瓦礫の山と化した。開港以来の街並みを失った横浜は、その後の震災復興事業を通じて、現在につながる都市の骨格を形づくっていく。新しい街並みの主役は、震災で大きな被害を受けた赤煉瓦の建築から、耐震耐火構造である鉄筋コンクリートの建築へと交代した。

## 被災写真が語るもの

震災からおおよそ1カ月を経た大正12(1923)年10月上旬の撮影と思われる写真が、①および②である。本町通り沿いの横浜中央電話局(当館所在地)の屋上から撮影されたもので、新築工事中であった電話局は、完成を目前にして震災に遭ったものの、一部鉄筋コンクリートを導入していた建物は、地震でも倒壊しなかった③。4階建てという高さ

## 運命を変えた区画整理

壊滅状態となった都市の復興に向けて、あらたなまちづくりの基盤となったのが区画整理である。政府による震災復興事業のなかで、横浜ではあわせて13の地区で区画整理が実施され、山下町をのぞく関内地区では、本町通りや関内大通り、尾上町通りなどで道路の拡幅が実施された⑤。いずれも、現在関内地区の主軸となっている道路である。

それまでの土地の区画を変更するのだから、たとえば横浜中央電話局のように、復旧工事の計画が立てられていながら、最終的には区画整理にともなう街路拡幅にあわせて解体された建物もあった。同様の可能性は、開港記念横浜会館にもあった。

震災後、復旧工事もなされず放置されていた記念会館は、一時は馬小屋にも使用されていたほどの荒れようであった(『横浜貿易新報』大正13年5月2日)。やがて区画整理にもない裏手の南仲通りの直線化が検討されると、予定道路に含まれる記念会館を解体する議論が起った(同上、大正14年9月26日)。しかし、横浜にとって重要なランドマークを解体することへの反対論がまさり、南



⑤第13地区土地区画整理図  
『横浜復興誌 第二編』(昭和7年)より  
黒く塗られているのが道路拡幅部分。

とがわかる。

②は、そこから180度反対の桜木町方面を望んだもので、手前には横浜生糸検査所、その奥には時計塔をもった開港記念横浜会館(現・横浜市開港記念会館)が写っている。遠方には、同じく倒壊をまぬがれた横浜正金銀行本店(現・神奈川県立歴史博物館)と川崎銀行横浜支店(現・日本興亜馬車道ビル)が確認できる。なお、大きく写り込んでいる星条旗は、電話局の隣地にあったアメリカ領事館(現・横浜情報文化センター所在地)のものである。

2枚の写真を比べると、旧居留地である山下町の被害がいかに甚大であったがわかる一方で、地震で倒壊しなかった建物も意外に多かったことが判明する。震災直後に陸軍が撮影した航空写真④でも、かつて太田屋新田・横浜新田であった埋立地が焼け野原となっているのに対して、本町通り沿いには残存建築の輪郭が幾つも確認できる。

なかでも②に写る開港記念横浜会館のように、煉瓦造建築の場合は、地震による被害が些少であっても、その後の火災で屋根に火が燃え移り、煉瓦壁だけを残して建物内部を焼失する事例が大半であった。震災の翌年、建築学会が発表した横浜における建物被害の統計データによると、主要な煉瓦造建築160棟のうち、被害皆無または僅少とされたものは35棟にのぼっている(田中大作「横浜市二於ケル建物被害統計」『建築雑誌』454号)。国内では明治中期以降、地震に弱いとされる煉瓦造建築への耐震技術の導入が進められてきたが、一程度の効果があったと認められる数字ではないだろうか。しかし、これら震災を生きぬいた建物も、その後の震災復興事業のなかでそれぞれの運命をたどっていく。

⑥現在の南仲通り



仲通りは記念会館の区画以外を直線化することで決着をみた⑥。  
建物の復旧工事は大正15(1926)年9月から始まり、翌昭和2(1927)年6月2日の開港記念日をもって、記念会館は再開館した。当日は「大横浜建設記念式」が開催され、大正14(1925)年に市長に就任した有吉忠二が、横浜市の震災復興を方向づける「大横浜」建設事業のスタートを宣言した。開港50周年を記念して建設された記念会館は、関東大震災を生きぬいたことで、今度は震災復興のシンボルとして、市民に都市横浜の復興を印象つける建物となった。現在、横浜三塔のひとつとして広く親しまれている記念会館であるが、こうした過去の先人たちの努力があつて、私たちに残された建物であることを忘れてはならない。  
(青木 祐介)

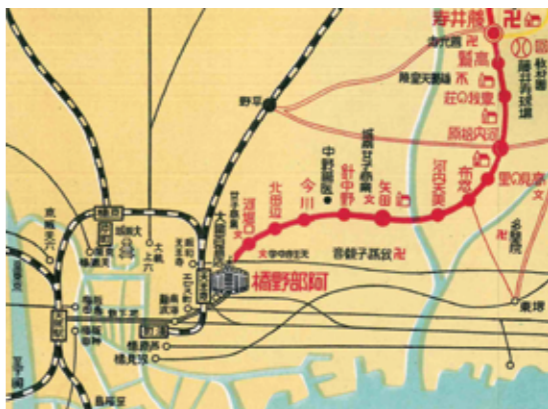
# 余話 展示

## 地図でみる

### 昭和初期の都市と野球場



①「近畿名所図絵」(部分)  
昭和15(1940)年、柳沼午郎氏寄贈・当館所蔵  
甲子園球場と西宮球場が描かれた部分を示す。  
大阪駅(梅田)から鉄道が伸びている。



②「大鉄電車沿線略図」(部分)  
昭和8(1933)年、天野太郎氏寄贈・当館所蔵  
図の全体には、藤井寺球場の他、大鉄(現・近鉄南大阪線)沿線の名所旧跡が描かれている。

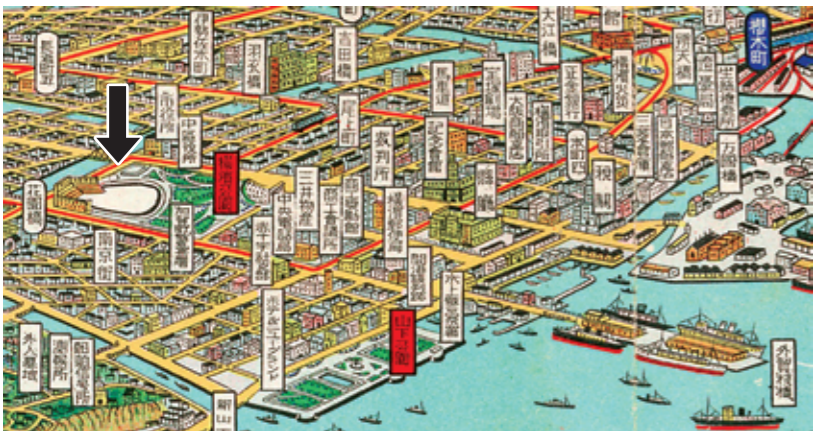


③「京都地図」(部分)  
昭和18(1943)年  
柳沼午郎氏寄贈・当館所蔵  
市街地(主に着色部分)ではない場所に西京極球場がつくられたことがわかる  
(矢印を加筆)。

④吉田初三郎「名古屋市鳥瞰図」(部分)  
昭和11(1936)年、当館所蔵  
名古屋南部の熱田地区から鳴海町の鳴海球場にかけての部分を示す(矢印を加筆)。



⑤ 5万分1地形図「東京西北部」(部分)  
昭和4(1929)年  
図の赤い線の右側が東京市域。神宮球場は市境付近で、新宿駅はまだ市外だった(市境と矢印を加筆)。



⑥ 吉田初三郎「横浜市鳥瞰図」(部分)  
昭和10(1935)年、当館所蔵  
「野球場」の文字はないが、「官庁街・ビジネス街のすぐそばにスタンドがそびえている」  
(矢印を加筆)

当館では今年の2月2日から4月7日まで、開館10周年を記念した特別展「ベースボール・シティ横浜〜ハマと野球の昭和史」を開催し、横浜の野球の歴史を紹介した。展示した資料は、野球用具や記念品類、当時の映像や写真、ポスター、切符など200点を超える。ただし、スポーツ史というテーマの性質上、地図資料の展示はわずかだった。もし地図を中心に野球の歴史を探るとすれば、野球場の立地という問題がトピックとして

浮かび上がるだろう。そこで、このページでは展示余話として、昭和初期の地図を見ながら都市と野球場の関係を考察してみたいと思う。明治時代の後半、野球は学生を担い手として日本全国に普及した。試合の場所となったのはまず学校の校庭だったが、次第に一般のグラウンドも整備された。そして、昭和初期には、1万人以上を収容できる規模の野球場がどの府県にも見られるようになる。とり

わけ東京や大阪などの大都市では、学生・社会人野球の全国大会や日米野球などの会場となりうる大規模な野球場が建設され、それは昭和11(1936)年に発足したプロ野球(職業野球)の試合でも使用されるようになった。紙幅の関係で、全国の各都市の野球場を取り上げることにはできないが、以下、黎明期のプロ野球が使用したものを中心に、昭和初期の六大都市の野球場をたどってみよう(年号は開場年)。

【大阪】大阪を代表する野球場として甲子園球場(大正13年)がある。開場以来、中等学校野球(現・高校野球)の全国大会の舞台となっており、また、プロ野球が最も古くより使用している野球場でもある。昭和20年代以前にプロ野球が使用した大阪周辺の野球場には、他に西宮球場(昭和12年)、そして藤井寺球場(同3年)や中百舌鳥球場(同14年)があった(いずれも現存せず)。これらの球場の共通点は、順に阪神、阪急、大鉄(現・近

鉄)、南海という電鉄資本によって整備され、その沿線の郊外に立地したことである。どれもが大阪市内になく、甲子園と西宮に至っては、その所在地は大府府ですらなく、兵庫県に含まれる(それでも実質的に大阪の郊外である)。

#### ①、②

【神戸】「京都」神戸と京都ではそれぞれ神戸市民運動場(昭和7年、現存せず)と西京極球場(同7年)において戦前、プロ野球の試合がたびたび開催された。前者は林田区(現・長田区)蓮池につくられ、そ

の立地は既成市街地の外れの部分だった。一方、後者は開通して間もない新京阪線(現・阪急京都線)の沿線につくられ、やはり郊外立地型の野球場だった。

#### ③

【名古屋】日本のプロ野球において、公式戦ではないが、最初の試合が行われたのは名古屋である。厳密には名古屋市の鳴海町(現在は市内)の鳴海球場(昭和2年、現存せず)にて行われた。鳴海球場は愛知電気鉄道(現・名鉄)が、阪神の甲子園などにならって、その

沿線開発の一つとして建設したもので、戦前は学生・社会人野球、日米野球、そしてプロ野球の試合が数多く開催された。

#### ④

【東京】早慶戦を中心に昭和初期に国民的な人気を博した東京六大学野球は、東京の明治神宮野球場(大正15年)で行われてきた。神宮球場は甲子園と並び日本野球の聖地と称される。ただし、戦後になるまでプロがそれを使用することは許されず、黎明期のプロ野球は、関西の甲子園と西宮、そして東京では後楽園スタジアム(昭和12年、現存せず)を最も主要な会場とした。その他、西武鉄道がその沿線にプロ野球用に建設した上井草球場(東京球場、昭和11年、現存せず)などもあったが、アクセスに時間を要するため、次第に使用されなくなった。東京では神宮と後楽園の二球場が(外れではあるが)旧来の市街地に立地したため、私鉄沿線の郊外立地型の野球場は大阪などのように発達しなかったのである。

#### ⑤

【横浜】「ハマの早慶戦」など、横浜でさまざまな野球の試合の舞台になったのは、横浜公園野球場(昭和4年、現存せず)である。収容人数が比較的少なく、恒常的ではな

かったが、昭和初期よりプロ野球の試合も開催された。横浜公園に設けられたこの野球場の非常に大きな特色は、当時の市街地の、さらにその中心部、つまり都心の交通至便の場所に立地したことである。

#### ⑥

(岡田直)

# プロ野球・ユニフォーム「復刻」物語

網島理友

アメリカのオークションにはベースボール・メモリアというジャンルがある。野球カード、サインボールといったものから、選手が着ていたユニフォーム、記念品、はてはもう無くなってしまった野球場の椅子までもが、高い値段で取引されている。それを見て驚いてしまうのは、ベースボールが誕生した19世紀のグズまで登場してくることがあるからだ。

物持ちのよいアメリカ人には本当に驚かされる。

一方、日本はどうか。

最近ではプロ野球のユニフォームのコレクターなども増えているが、残念ながら取引されているものは70年代あたりまでがいいところ。それより以前のユニフォームはほとんどお目にかかれない。

そもそも残っている実物が少ない。どの球団に行っても、残っているのはやはり70年代以降がほとんど。中には古いユニフォームをまったく残していない球団もあるくらいだ。

たとえば戦前のプロ野球のユニフォームなんてことになると、博物館関係も回っても数えるほどしか現存していない。

1935(昭和10)年の大日本東京野球倶楽部、1936(同11)年の東京ジャイアンツ、1936(同11)年の大阪タイガース、1937(同12)年の名古屋軍。博物館関係で現存が確認されているのはこれだけだ。

あとは日本にプロ野球誕生のきっかけを作った1934(昭和9)年の日米野球。横浜でも試合が行われたが、このときの

全日本と全米オールスターチームのユニフォームが残されている程度だ。

日本の場合、一軍で使用したユニフォームは二軍が使い、そのあとは練習用にしてポロポロになるまで使い切る。そして最後は雑巾やボロ布というパターンが多い。戦前のユニフォームだと、戦時中に子供服に仕立て直したなんて話も聞いた。

とにかく最後まで使い切ってしまうのが、日本人のモノを大切に感じる感覚なのだ。一方、アメリカ人にとってモノを大事にするということは、大切にしておくということ。これはプロ野球のユニフォームを研究している気が付いた日米の違いである。

2005(平成17)年に「プロ野球ユニフォーム物語」という本を出版した。これは日本プロ野

球の創設期から現在までのユニフォームを図解で網羅した本である。

この本の制作でいちばん苦勞させられたのが、ユニフォームの色だった。雑誌や写真が残っているのに、形についてはある程度までわかるのだが、昔の資料はほとんどがモノクロ。昔のユニフォームの色が全く分からないのだ。

そこで色については当時を知る人たちから話を聞くしかないということになった。調査を始めたのが1998(平成10)年。このときはまだ、プロ野球創世記に活躍された選手の方で生きておられる方も多かった。北は東北から南は九州まで、聞き取りに歩いた。

しかしユニフォームの色について調査する人間は今までいなかったようで、どなたを訪ねても面食らわれてしまった。昔の記録とか武勇伝なら語りなれているOBたちも、私の繰り出す質問には困ったという感じがあった。だいたい昔のユニフォームの色なんて、おおよっぱには記憶しているが、細部になると記憶が飛んでしまっている方がほとんど。証言を引き出すのは難

しい作業だった。

しかし中にはすごい方もいた。よく覚えておられたのが長嶋茂雄さんの前の巨人軍背番号3で、猛牛と呼ばれた千葉茂さんだ。相手チームのユニフォームの色まで教えてくださったのには感激してしまった。戦前のユニフォームについての多くは、千葉さんの記憶に頼るところが多かった。

それから印象深かったのが荻田久徳さんだ。本牧中学出身の法子で、法政から大日本東京野球倶楽部に入団してアメリカ遠征にも参加したが、球団の首脳と対立して退団。そのあと東京セネターズに身を転じて、名人とあがめられた戦前の職業野球の名内野手だ。洋光台のアパートに奥様と二人で住んでおられたのだが、ご本人はユニフォームについては記憶外。困ったなと思っていたら、脇から奥様が「これは赤だったと思う」と、助言をはじめてくださった。実は当時のユニフォームは選手が家に持ち帰って洗濯をしていた。荻田さんは自宅に若い選手たちを合宿させていたので、彼らのユニフォームもすべて奥様が洗っていたのだ。

「私ほね、洗濯で細かいところの泥まで落としていたから、だいたい覚えています」

奥様はそう言って、荻田さんが所属していた戦前の東京セネターズから、戦後のセネターズ、そして毎日オリオンズや近鉄パールズまで、解説してくださった。

今シーズン、埼玉西武ライオンズが毎年恒例の歴史イベントであるライオンズクラシックで東京セネターズのユニフォームを復刻するが、これが出来るのも実は洗濯をしていた荻田さんの奥様のおかげなのである。

\*1 本牧中学校  
横浜市中央区にあった私立の旧制中学校で、戦後すぐに現在の横浜高等学校に吸収された。  
\*2 東京セネターズ  
戦前にあったプロ野球の球団。現在の西武新宿線を開通させた当時の西武鉄道が運営に参加し、沿線の杉並区に上井草球場を設けた。

\*当館特別展「ベースボールシテイ横浜」ハマト野球の昭和史(本年11月2日から12月7日まで開催)では、大洋ホエールズから横浜ベイスターズを中心に、編島理友氏が復元された過去のプロ野球ユニフォームのイラスト(綿谷寛氏・画)を多数展示しました。

## ①来日した全米オールスターチーム

1934(昭和9)年 『横浜グラフ』(当館所蔵)より横浜公園野球場で試合が行われたときの写真。



## ②全米オールスターチームのユニフォームの復元画

綿谷寛氏・画、網島理友事務所所蔵  
1934(昭和9)年の日米野球で使用されたもの。ペーブ・ルース選手も着用した。



## ④東京セネターズのユニフォームの復元画

綿谷寛氏・画、網島理友事務所所蔵  
ストッキングに赤色の帯が入っている。



## ⑤『職業野球便覧』

1939(昭和14)年  
当館所蔵  
表紙と東京セネターズのページの冒頭。  
荻田久徳監督(選手兼任)を紹介している。

